

色、形、光、音、リズムを 駆使して花火大会を演出

宗家花火鍵屋 15代目当主・天野安喜子さん

江戸年間から続く花火の老舗・宗家花火鍵屋。その15代目当主の天野安喜子さんは花火の演出に音楽を取り入れて、江戸川花火大会などをより一層印象深いものにしている。男の世界に飛び込んで、辛い思いをしたこともあったが、花火師になったことを悔やんだことはただの一度もないという天野さん。日本独自のわびさびの文化や伝統を守りながら、花火の世界に新しい道を切り開いていくことを目指し、今年もまた夏の夜空に大輪の花を咲かせようとしている。

350年の歴史で 初めての女性当主

1659（萬治2）年というから、徳川四代将軍・家綱の時代のことである。初代・弥兵衛が奈良の篠原村から江戸へ出て、日本橋の横山町に店を開き、葦の管に火薬玉を入れて売り出したところ、飛ぶように売れた。これが宗家花火鍵屋の始まりである。花火を打ち上げたとき「鍵屋～」と声がかかるのは、この鍵屋に由来している。ちなみに「玉屋～」というのは、鍵屋の7代目の番頭が暖簾分けして店を開いた際に用いた屋号である。つまり、江戸の花火の歴史は、鍵屋の歴史そのものといっても過言ではない。

天野安喜子さんがその鍵屋の15代目を襲名したのは、2000年1月のこと。鍵屋350年の歴史で初めての女性当主である。

「小学2年生のときに、自分が父の後を継ぐと言いました。実際に継い

だのはそれから25年後くらいですが、その間に迷ったり気持ちが変わったりするようなことは一切ありませんでした」

凛としたたずまいの天野さんが、はっきりとした口調でいう。

鍵屋には、江戸時代の花火の製造法などについての口伝を書き残したものが代々伝わっている。天野さんによれば初代の頃は狼の糞や枯れ草などを混ぜて乾燥させたものを丸めて火薬代わりに使い、火を着けた花火を手で持って楽しむものだったという。今のようになんか丸く見えるように開く打ち上げ花火が登場したのは、明治以降のことだ。

鍵屋もかつてはそうした花火の製造をしていた。しかし天野さんの父親である14代目の天野修さんは「これからは演出の時代になる」と考え、打ち上げと演出を主体にする経営に切り替えた。そのため現在、鍵屋は花火の製造をしていない。ただ、天野さんは、花火づくりを知らないとい

いい演出ができないし、花火職人の信頼を得ることも難しいと考え、23歳のときから2年間、花火工場で修行を積んだ。

自然を活かした演出を

実は天野さんが花火工場での修行をしたいと申し出たとき、修さんは反対した。火薬を扱う花火工場は危険だし、女性のご法度という古いしきたりが残る世界だったからだ。天野さんは父親の修さんを尊敬し、「父の言うことは絶対です」という。「花火師を目指したのではなく、父を目指してきました」とも。ところがこのときは母の力も借りて父を説得し、自分の意志を貫いた。

その甲斐あって、天野さんは2年間の修行を終えると自分自身の成長を実感していた。

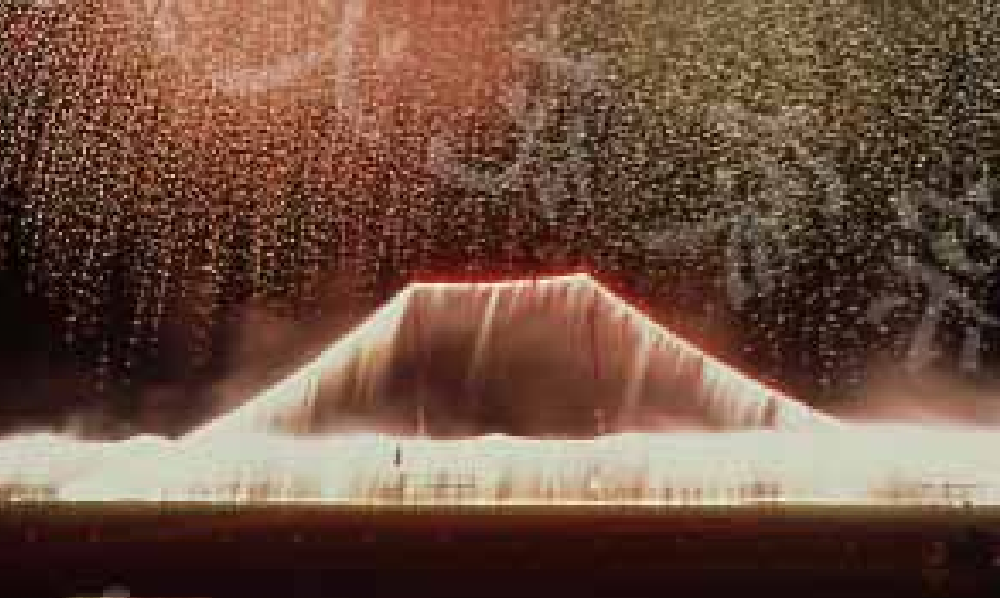
「職人の大変さや、コミュニケーションの難しさなど、花火の製造法以外にもたくさんのお話を学びました。



花火を何個も組み合わせ、連続して一気に打ち上げるスターメイン。©Kazutoshi Murata



[あまの・あきこ] 1970年、東京都江戸川区で宗家花火鍵屋14代目の次女として生まれる。小学2年生のときに自分が15代目を継ぐと宣言。同時に始めた柔道は、1986年福岡国際女子柔道選手権大会で銅メダルを獲得、1995年現役を引退。2000年に宗家花火鍵屋女性初の15代目を襲名。2008年北京オリンピック柔道競技審判員（日本女性初）。男子100kg級決勝などで主審を務める。現在講道館女子柔道6段の猛者。2009年日本大学大学院芸術学研究科芸術専攻博士後期課程修了。博士（芸術学）。保有資格・免許は、火薬類取扱保安責任者、火薬類製造保安責任者、国際柔道連盟審判員資格、柔道整備師、など。鍵屋15代目当主として仕事をする一方、子どもたちに柔道の指導もしている。



写真上段：大量の火薬をワイヤーで山型に高く吊るし、一斉に点火。火の粉がさらさらと流れ落ち、富士山が浮かび上がる。下段左：鍵屋の旗はためく、仕掛け花火の現場。仕掛け花火は、ロープ・ワイヤーに焰管（ランス）を文字や絵の形に組み立て、点火する。下段右：鍵屋が開発した電気点火器。打ち上げ場の周辺数百メートルに人の姿はない。©Kazutoshi Murata

教えてくれないのなら盗めばいいと考えるほど、技術や知識の習得に対して貪欲にもなりましたね」

花火大会の演出は、主催者側と協議しながらプランを練っていく。全体の構成を決め、場面ごとのデザインをし、それに適した花火を工場に発注するのが大まかな流れだ。花火には、色、形、光、音、リズムという5つの要素がある。それらをすべて指定して発注する。同じ赤でも、工場によって微妙に色合いが異なる。そうしたことまですべて踏まえておかないと、狙い通りの演出はできない。天野さん自身は頭の中に打ち上げたときのイメージができあがっているが、主催者側に説明するためにパソコンで絵コンテも描く。

大規模な花火大会だと、準備期間に半年近くを要することもある。大会が終わった瞬間、「来年はこういうことをしよう」とアイデアが浮かぶこともあるが、考えに考え抜いて

も全くプランが浮かんでこずに四苦八苦することもある。そういうとき、天野さんは自然の中に身を置くことがある。

「たわわに実った稲穂を見れば幸せを感じますし、稲妻を見たときには自然の脅威が体に響きます。私は、自然から強い刺激を受けていると思います。だからいつも自然を活かした演出をしたいと考えているんです」

音源も自分で選択

父の修さんは色を重視した演出をしたが、天野さんは音にこだわっている。打ち上げるときの“ズドン”という音、上昇していくときの“ヒュー”という音、上空で花火が開くときの“バン”という音、そして開いた花火が下降していくときの“ジジジ”という音。山間部で打ち上げるときは、こだまも音の要素に加わる。天野さんはさらにそこに音楽を加えること

もある。そういうときはどんな音楽を使うか、音源も天野さん自身が選択する。花火の演出に音楽を使う例は前からあったが、音源まで自分で選んで演出するようにしたのは、天野さんが初めてだ。花火と音楽が織りなす一大ページェント。それはまさにアートの世界である。

もうひとつ、天野さんはリズムも大切にしている。

「打ち上げのリズムが人の呼吸より遅すぎると、イライラ感が出てきてしまうことがあります。そういうときはいい花火を打ち上げても拍手をいただけません。人の感動するリズムや会場全体の空気感を受け止めて打ち上げていくことがとても大切なんです」

天野さんは2009年に日本大学の大学院で博士号を取得している。博士論文のタイトルは「打ち上げ花火の『印象』—実験的研究による考察」。打ち上げ花火で人が感じる印象、感動、興奮などを学術的に研究したのである。

15代目を襲名してからは、現場の指揮はすべて天野さんに任せられるようになった。集客数日本一の江戸川花火大会の場合、打ち上げに関わる職人の数は約100人に達する。それを統率するのが、天野さんだ。約14,000発の花火は、すべて天野さんの合図に従って打ち上げられる。観客の反応や会場の雰囲気を見ながら、天野さんが出す合図を見て、職人が着火していくのだ。

着火はすべて電気による遠隔操作で行われる。以前は手で直接着火していたが、電氣化によって安全性が飛躍的に向上した。この電氣化を完成させたのは、父の修さんだ。修さんも伝統を守りながら花火の世界を革新してきた人である。

「たとえば10カ所から花火を同時に打ち上げたいとき、合図に合わせて10人の職人がそれぞれ人手で着火していたら、どうしてもずれが出てきてしまいます。それが電氣式だ

と0.1秒のずれもなく、こちらの意図したとおりのタイミングで着火していくことができます。そうすると演出に幅が出ますし、時間的に正確なので音楽も入れやすくなる利点があります」

演出の中に 意味性を持たせたい

ここでひとつ、疑問が浮かび上がるのではないだろうか。一連の作業をすべて電気化して自動化すれば、天野さんがいちいち合図を出す必要もなくなるのでは、と。だが、すべて自動化してしまうと、お客の反応に合わせて打ち上げのタイミングを微調整していくことができなくなる。天野さんは、打ち上げた花火が消えたあとの残像や余韻も客が楽しめるような演出をしている。そのためにはやはり客の反応を見ながら手動で

電気着火していくのがいいのである。江戸川花火大会の場合、天野さんは1時間15分ほどの間に200回以上、合図の手を振る。体力的にも相当きつい仕事だが、柔道6段の天野さんは「体力だけは自信があります」とこともなげに言う。

小学2年生のときから柔道を始めた天野さんは、1986年、16歳のとき福岡国際女子柔道選手権大会で銅メダルを獲得。2001年には国際柔道連盟審判員の資格も取得した。そして2008年に開かれた北京オリンピックに日本人女性として初めて柔道競技審判員として参加。男子100キロ級の決勝戦の主審を務めた。このときはさすがの天野さんも「緊張のあまり、試合の前はしゃべりまくってました」というが、畳の上に入った途端、平常心に戻れたという。そんな天野さんだが、花火大会が

行われている間、自分自身が空を見上げてゆっくり花火を見ることはほとんどない。鍵屋の代表として現場を仕切る責任者としては、何よりも安全を第一にしなければならない。事故は絶対に許されない。だから演出に気を配り、職人に合図を出しながらも、職人一人ひとりや観客の動きをずっと注視し続け、耳をそばだてている。おかげで今は、打ち上げたときの音を聞いただけで、異常が分かるようになったという。

修さんが電気化を進めていたとき、業界の中では「花火師のくせに花火が怖いのか」「鍵屋は情けない」という声の一部でささやかれた。天野さんはあるとき、職人から面と向かってそう言われたこともある。悔しくてそれを伝えると、修さんは穏やかな口調でこういった。「自分の見栄とかプライドよりも、安全の方がずっと大事だろう」

天野さんは、自分が責任者になって、その言葉の意味が本当に実感できるようになったという。そしてこう続ける。

「父には、人から何を言われようとも自分の信じた道をまっすぐ進む強さがあります。私もそうありたいと思っています」

天野さんが演出を引き受けている花火大会は年に8回ある。やはり夏が多いが、最近は冬や春の花火大会もある。それぞれの主催者の意図に応じて演出プランを練るが、今、天野さんは演出の中に意味性を持たせることを考えている。

「たとえば花火で四季を表現して、日本の風情を取り戻したいという気持ちで伝えられたらいいなって思っているんです」

春は桜、夏はスカイブルー、秋は夕暮れ、そして冬は雪…。

夜空に咲く大輪の花火でそんな演出ができれば、きっと会場中の人々が感動で息をのむだろう。そして一呼吸置いて、きっと声がかかる。

鍵屋～、イヨッ、日本一～、と。

「若い頃からいつも花火の筒のそばにいました」。現場で纏う半纏は、火の粉よけの役割も担っている。

